

令和6年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

- この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
- この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
- この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
- 問題は、全て五肢択一式です。
- 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
- 解答に当たっての留意事項は、下記の(1)及び(2)のとおりです。
 - 適用すべき法令については、令和6年1月1日現在において施行されているものとします。
 - 地方公共団体の条例については、考慮しないものとします。
- この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。
(中途退出者については、持ち帰りを禁止します。)

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床の単位面積当たりの固定荷重は、一般に、床梁の張り間(スパン)が大きいほど小さい。
2. 短期に生ずる力を計算する場合には、一般に、積雪時、暴風時、地震時を想定する。
3. 多雪区域において、長期に生ずる力を計算する場合、固定荷重、積載荷重及び積雪荷重を考慮する。
4. 固定荷重に対する積載荷重の割合は、同規模・同形状の場合、一般に、鉄筋コンクリート造建築物より木造建築物のほうが大きい。
5. 積載荷重は、一般に、不均一に作用するが、建築物の実況に応じて、単位面積当たりの荷重として取り扱う。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震層せん断力係数は、一般に、上部の階ほど大きくなる。
2. 2階建ての建築物に作用する地震力は、一般に、2階部分に比べて、1階部分のほうが大きい。
3. 多雪区域において、地震力と積雪荷重による力は同時に作用するものとして考える。
4. 勾配屋根面に作用する風圧力は、屋根勾配によらず正圧となる。
5. 風圧力の計算に用いる速度圧は、一般に、地盤面からの高さが高い部位ほど大きい。

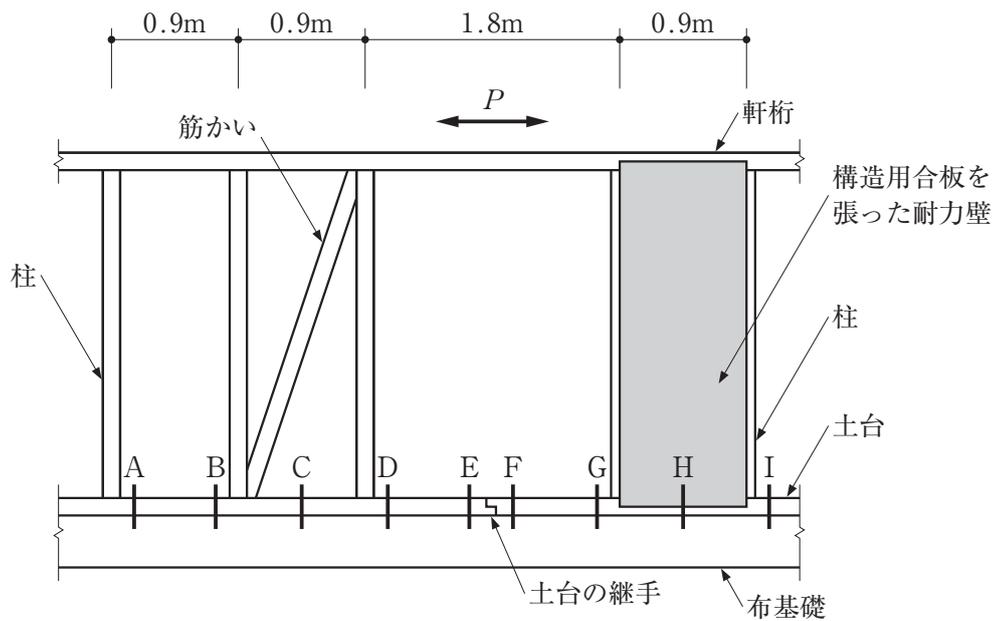
〔No. 3〕 木造建築物における部材の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 振れ止め ————— 小屋組
2. フーチング ————— 布基礎
3. 対束 ————— 床組
4. 地貫 ————— 軸組
5. 側桁 ————— 階段

[No. 4] 木造2階建ての建築物における基礎又は地盤に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、基礎については構造計算を行わないものとする。

1. 切土及び盛土を行った造成地盤において、建築物は盛土側に設置した擁壁からできるだけ離して計画した。
2. 地盤の長期許容応力度が 70 kN/m^2 であったので、べた基礎の底盤の厚さを 100 mm とした。
3. 布基礎の立上り部分の主筋として、D13 を立上り部分の上下端に1本ずつ配置した。
4. 布基礎の立上り部分の厚さを、 150 mm とした。
5. 地盤補強として用いた小口径鋼管とべた基礎との間に、捨てコンクリートを介在させた。

[No. 5] 図のような木造の軸組に、左右の方向から水平力 P が作用するとき、アンカーボルトの位置A～Iの組合せとして、最も適当なものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。

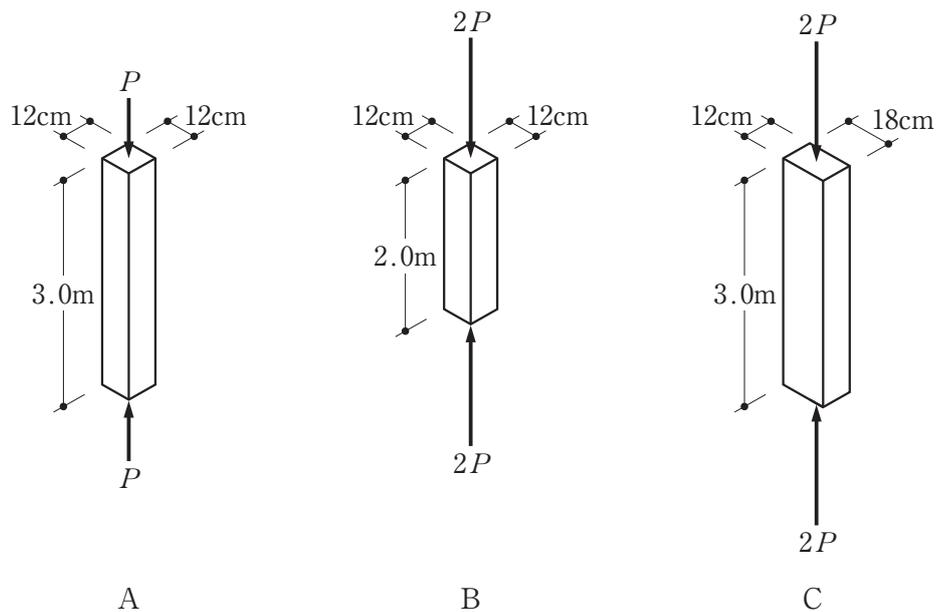


1. A、C、E、H、I
2. A、D、F、G、I
3. B、D、E、F、H
4. B、D、E、G、I
5. B、D、F、G、I

[No. 6] 木造軸組工法による2階建て住宅の柱及び横架材に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 横架材の-span表は、あらかじめ所要の構造計算等を行ったうえで作成された、断面寸法を求めるための早見表である。
2. 母屋の継手は、小屋束間の中央部付近を避けて設ける。
3. 柱に心持ち材を用いる場合、表面のひび割れを防ぐためには、面取りをすることが有効である。
4. 隅柱を通し柱とせず管柱とする場合、胴差と管柱の接合部は、通し柱と同等以上の耐力を有するように補強する。
5. 桁や梁で構成される水平構面を堅固にするためには、隅角部に火打梁を配置する。

[No. 7] 図のように両端から荷重を受ける木造の柱A、B及びCの座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は断面の図心にかかるものとする。



1. $A = B > C$
2. $A > B = C$
3. $B > C > A$
4. $B > A > C$
5. $B = C > A$

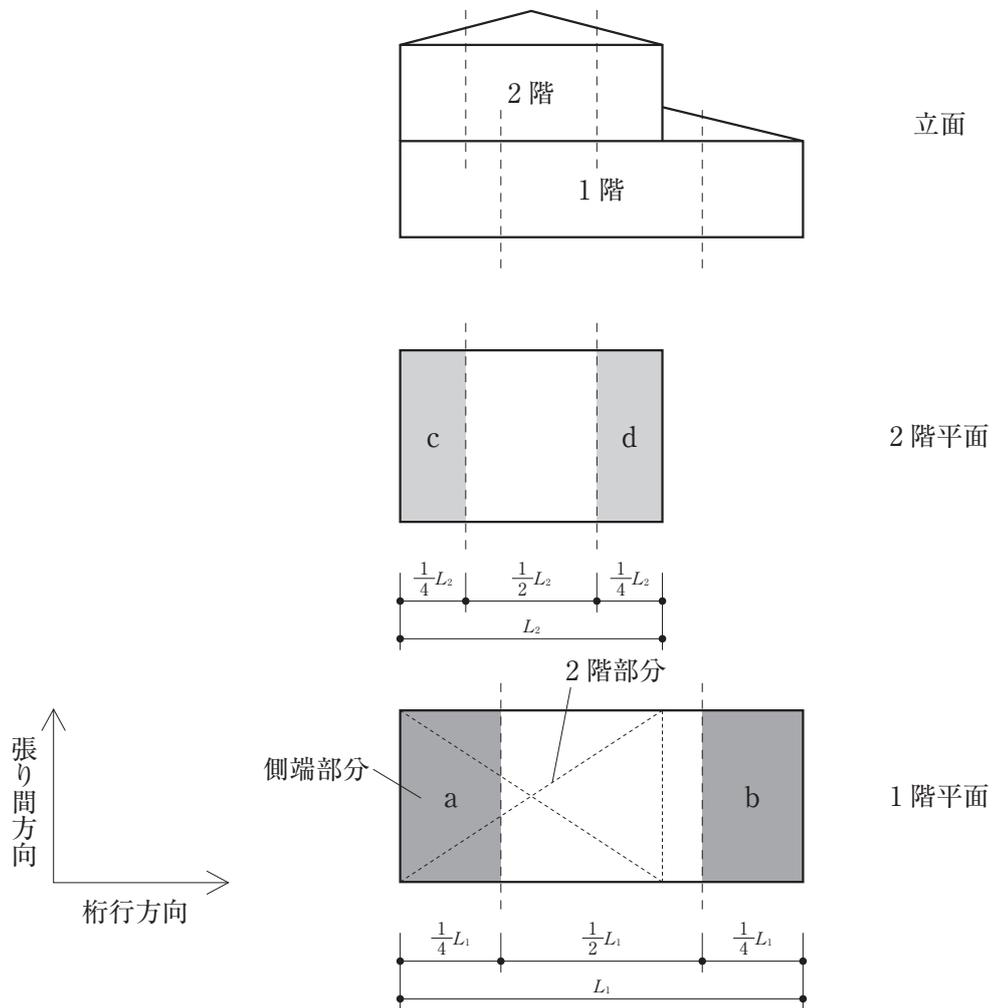
〔No. 8〕 木造建築物の床梁の断面寸法を決める場合、最も重要性の低いものは、次のうちどれか。

1. 床梁の配置間隔
2. 床梁のたわみ量
3. 室の用途
4. 床梁の樹種
5. 床板の厚さ

〔No. 9〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

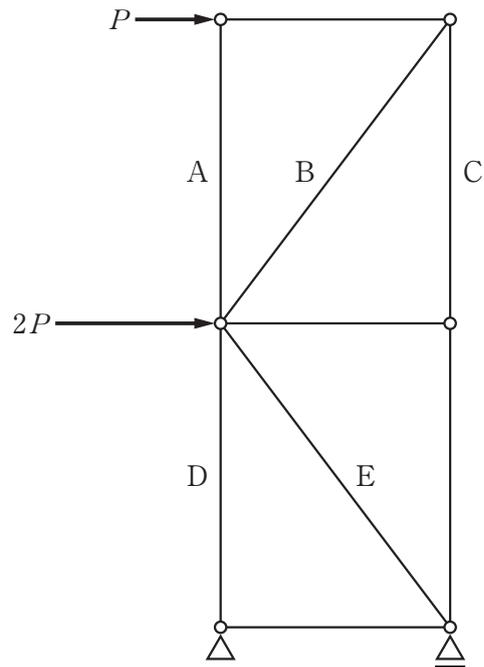
1. 大壁仕様の耐力壁において、構造用面材を同じ面に2枚重ねて釘で打ち付けた場合の壁倍率は、1枚で打ち付けた場合の2倍とすることはできない。
2. 片面に大壁仕様で構造用面材を釘打ち張りし、他の面に真壁仕様で構造用面材を釘打ち張りした耐力壁の倍率は、5倍を限度として、それぞれの倍率を合計した値とすることができる。
3. 大壁仕様の耐力壁において、構造用合板(910 mm×1,820 mm)を縦張りする場合、その継目部分には、断面30 mm×40 mmの胴つなぎを設けて釘打ち接合する。
4. 筋かいをたすき掛けとするために、やむを得ず筋かいを欠き込む場合は、必要な補強を行う。
5. 筋かいと間柱が交差する部分では、間柱に欠き込みを行う。

[No. 10] 図のような木造軸組工法による2階建ての建築物において、建築基準法に基づく「木造建築物の軸組の設置の基準(四分割法)」に従った軸組配置の検討に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



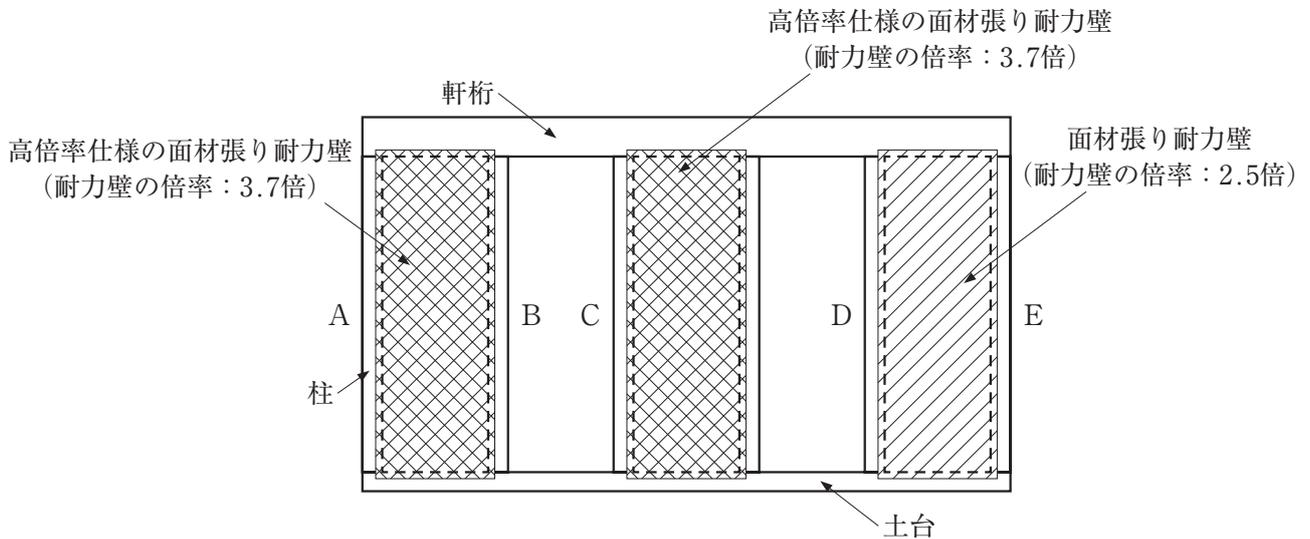
1. 張り間方向の1階側端部分の必要壁量の算出に当たって、側端部分 a 及び側端部分 b の面積を用いた。
2. 張り間方向の2階側端部分の必要壁量の算出に当たって、側端部分 c 及び側端部分 d の面積を用いた。
3. 張り間方向の1階側端部分の必要壁量の算出に当たって、側端部分 b については、2階建ての1階部分として床面積に乗じる値を決定した。
4. 1階及び2階の各側端部分について、存在壁量を必要壁量で除して壁量充足率を算出した。
5. 1階の各側端部分の壁率比が0.5以上であることを確認した。

[No. 11] 図のような水平力 P 及び $2P$ が作用する軸組の部材A～Eについて、部材に生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、軸力が生じない。
2. 部材Bには、引張力が生じる。
3. 部材Cには、圧縮力が生じる。
4. 部材Dには、軸力が生じない。
5. 部材Eには、圧縮力が生じる。

[No. 12] 図のような平家建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱 A～E の脚部に生じる引抜き力が最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。また、及び部分は面材張りの耐力壁を示し、耐力壁の倍率は図に示す値とする。

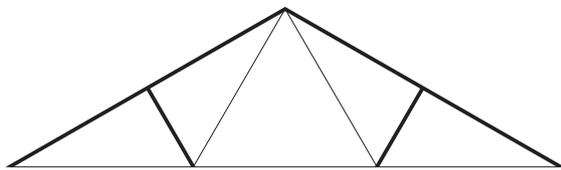
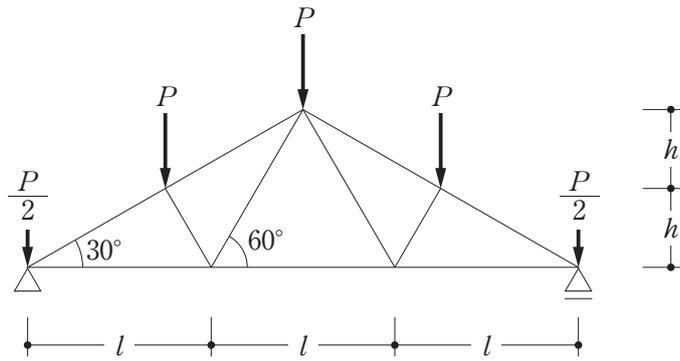


1. A
2. B
3. C
4. D
5. E

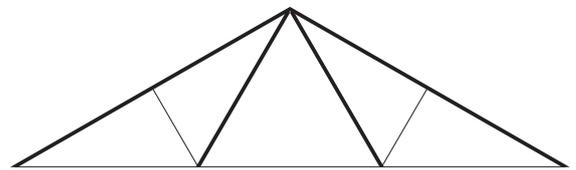
[No. 13] 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. うし梁(敷梁)は、小屋梁を途中で受ける大断面の梁である。
2. 合掌造りには、棟持ち柱式、天秤梁式などがあり、室内が広く利用できる特徴がある。
3. 扇垂木は、放射状に配される垂木であり、仏教建築などに見られる。
4. 登り梁は、勾配天井などを設ける際に、勾配方向に桁から角度をつけて架けた梁である。
5. 配付け垂木は、寄棟屋根において、隅木の側面に斜めに取り付ける垂木である。

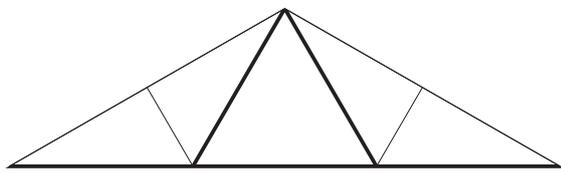
[No. 14] 図のような荷重が作用する洋小屋組において、部材に生じる軸力を示すものとして、正しいものは、次のうちどれか。



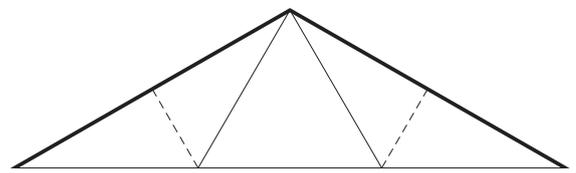
1.



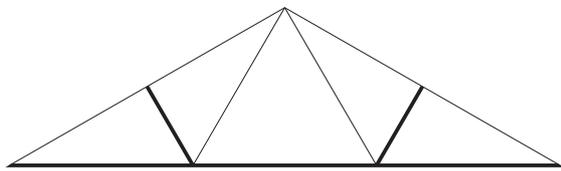
2.



3.



4.



5.

- 圧縮力を受ける部材
- 引張力を受ける部材
- - - 軸力が生じていない部材

〔No. 15〕 次の木造建築物の2階床組について、床の水平剛性が最も小さいものはどれか。ただし、面材及び板材の釘打ち間隔、根太の断面及びその取付け等は、それぞれ所定の方法によるものとする。

1. 火打梁を設けず、厚さ15mmの構造用合板を、床梁及び根太等にN50釘で打ち付けたもの
2. 火打梁を設けず、厚さ15mm、幅180mmの挽板^{ひき}を、根太にN50釘で打ち付けたもの
3. 火打梁を設けず、厚さ15mmの構造用合板を、床梁に根太せいの $\frac{1}{2}$ を落とし込んで取り付けた根太にN50釘で打ち付けたもの
4. 火打梁を設けず、厚さ24mmの構造用合板を、910mm間隔に配置した床梁及び受け材にN75釘で打ち付けたもの
5. 火打梁を設け、厚さ15mmの構造用合板を、床梁の上に載せて釘留めした根太にN50釘で打ち付けたもの

〔No. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 屋根を構成する垂木相互の間隔を455mmとし、屋根下地材として、厚さ12mmのパーティクルボードを用いた。
2. 多雪区域内に建つ建築物であったので、地震力に対する必要壁率の値は、垂直積雪量に応じた値とした。
3. 床版の枠組材と床材をCN50釘で緊結するに当たって、床材の外周部分の釘間隔を150mmとした。
4. 屋根面に幅3mの開口部を2つ設けるに当たって、開口部相互を1,200mm離して配置した。
5. せっこうボード張り耐力壁のせっこうボードの取付けに、GNF40釘を用いた。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 軟弱地盤に建つ建築物であったので、建築物に配置する耐力壁の量を1.5倍とした。
2. 吹抜けを有する建築物の2階の壁量計算用の床面積を算定するに当たり、2階の床面積に吹抜け部分の床面積を加えた。
3. 横架材間の距離が1階と2階で同じである建築物の柱の小径について、2階の小径を1階の小径と同じとした。
4. 平面的な剛性分布のバランスの指標である偏心率が0.3以下となるように、耐力壁を配置した。
5. 風圧力に対して必要な耐力壁の量を、建築物の階数、床面積及び壁・屋根の重量に基づいて算定した。

〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の高いものは、次のうちどれか。

1. 1階床組の大引と根太とを、金物により緊結した。
2. 屋根瓦材を、住宅屋根用化粧スレート瓦から日本瓦に葺き替えた。
3. 2階床の吹抜け部分に、新たに火打梁を設置した。
4. 既存のモルタル外壁の上にサイディングを張った。
5. 鉄筋コンクリート造の基礎を有する1階の床組において、床下地材を小幅板から構造用合板に張り替えた。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(束立て床)
床板 → 根太 → 大引 → 床束 → 東石
2. 1階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木^{つり} → 吊木受^{つり} → 梁
3. 2階床荷重(桝組壁工法)
床材 → 床根太 → 上桝 → 頭つなぎ → たて桝 → 下桝
4. 2階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木^{つり} → 吊木受^{つり} → 小屋梁
5. 屋根荷重(和小屋折置組)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 小屋束 → 小屋梁 → 柱

〔No. 20〕 木材の強度等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材のせん断に対する基準強度は、樹種によって規定されている。
2. 浴室など常時湿潤状態にある部分に使用する製材の許容応力度は、乾燥した状態で使用するときよりも低減する。
3. 製材の座屈の許容応力度は、その材の有効細長比が大きいほど小さくなる。
4. 繊維傾斜角(材軸と繊維方向のなす角度)が大きい製材の曲げ強度は、一般に、繊維傾斜角が小さい製材の曲げ強度よりも小さい。
5. 木材の曲げ強度は、一般に、梁せいが大きいほど大きくなる。

〔N o. 21〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。

1. 木材の半径方向、接線方向及び繊維方向の乾燥収縮の比は、20：10：1 程度である。
2. 木材の水分の吸収速度は、一般に、柃目面より板目面のほうが速い。
3. 木材の気乾含水率(大気中に放置した状態で乾燥させた木材の含水率)は、我が国では約 15 % である。
4. 比重の大きい樹種は、比重の小さい樹種に比べて圧縮強度が大きい。
5. 木材を加熱した場合、約 260℃に達すると引火し、約 450℃に達すると周囲に炎がない場合でも自然に発火する。

〔N o. 22〕 木造建築物の防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。

1. 木材は、一般に、含水率が 25～35 %を超えると腐朽しやすくなる。
2. 加圧式防腐処理木材であれば、現場で切断しても、加工面の再処理を行わずに用いることができる。
3. 薬剤処理による防腐は必要最小限とし、防雨・防水・防露に配慮した腐朽しにくい構造(構造法)にすることが望ましい。
4. イエシロアリは、乾燥した木材であっても食するので、建築物の小屋組のような上部の構造材にも被害が及ぶことがある。
5. ヒノキやヒバの辺材は、一般に、心材と同様な耐久性が期待できない。

〔N o. 23〕 木質材料に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。

1. 「集成材の日本農林規格」における集成材は、アセトアルデヒド放散量の大小によって性能区分される。
2. 「合板の日本農林規格」における化粧ばり構造用合板は、構造用合板の表面又は裏面に、木材質特有の美観を表すことを主な目的とした単板をはり合わせたものである。
3. 木片セメント板は、木片とセメントを混和し、圧縮成形したボードである。
4. JISにおいて、繊維板は、密度、用途等によってインシュレーションボード、MDF(ミディアムデンシティファイバーボード)及びハードボードに区分される。
5. 「枠組壁工法構造用製材及び枠組壁工法構造用たて継ぎ材の日本農林規格」における枠組壁工法構造用たて継ぎ材は、枠組壁工法構造用製材をフィンガージョイントによって長さ方向に接着したものである。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 鉄筋とコンクリートを一体化させるには、丸鋼より異形鉄筋のほうが優れている。
2. 鉄筋コンクリート用棒鋼を格子状に組み、交点を溶接したものを鉄筋格子という。
3. 普通コンクリートは砂利や砂などを骨材としたコンクリートであり、軽量コンクリートは普通コンクリートよりも軽い骨材を使用しているコンクリートである。
4. コンクリートの乾燥収縮は、一般に、水セメント比の大きいコンクリートほど大きくなる。
5. ブリーディングは、コンクリート打設後に、骨材の一部が分離してコンクリート上面に上昇する現象である。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 土壁に用いる壁土を作業工程によって分類する場合、小舞壁下地に最初に塗る荒壁土、中塗り用の中塗り土、最終的な表面仕上げとなる上塗り土に分けられる。
2. 粘土瓦は、一般に、セメント瓦に比べて、耐久性に優れている。
3. Low-E複層ガラスは、中空層側のガラス面に特殊金属膜をコーティングしたものであり、日射取得型と遮蔽型を使い分けることができる。
4. せっこうボードは、表面に紙を用いているが、防火性に優れている。
5. ステンレス鋼は、主成分であるアルミニウムに、クロムやニッケルなどを配合した合金である。

学科Ⅳ（建築施工）

〔No. 1〕 工事現場における材料等の保管に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. せっこうボードは、表合わせの2枚組として、平積みで保管した。
2. アルミニウム製建具は、自重による変形を防止するために、立てかけて保管した。
3. 巻いたシート状の壁紙は、くせが付かないように、井桁に組んで保管した。
4. 巻いたビニル床シートは、縦置きにして、転倒防止のために、ロープで柱などに固定して保管した。
5. ロールカーペットは、横置きにして、2段の俵積みにして保管した。

〔No. 2〕 木造2階建て住宅の工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 折りたたみ式の脚立は、脚と水平面との角度を80度として使用した。
2. 仮囲いに設ける出入口の扉は、内開きとした。
3. 単管足場の地上第一の布の高さは、地盤面から2mとした。
4. 単管足場の建地間の最大積載荷重は、400kgとした。
5. くさび緊結式足場の壁つなぎの間隔は、垂直方向5m、水平方向5.5mとした。

〔No. 3〕 木造2階建て住宅における地盤調査及び仮設工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

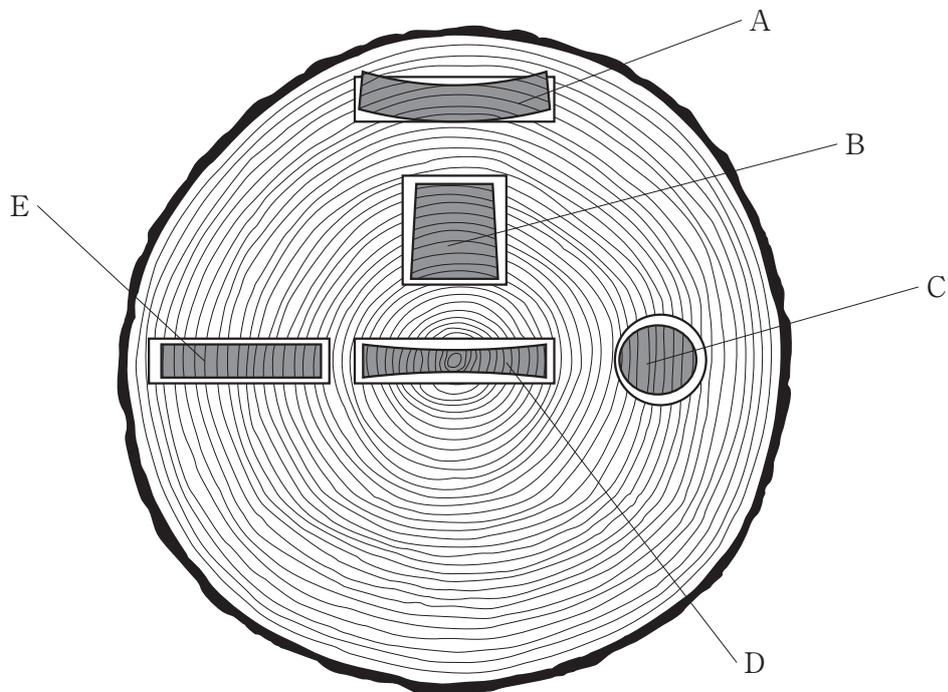
1. 地盤調査は、近隣の地盤調査データから計画地の地盤状況を予測したうえで、実施する。
2. スクリューウエイト貫入試験(旧スウェーデン式サウンディング試験)は、鋼製のおもりによる貫入と、回転貫入を併用して行う試験である。
3. 縄張りは、敷地の形状を明確にすることである。
4. ベンチマークは、建築物の高さ及び位置の基準点である。
5. 遣方は、建築物の水平及び柱などの位置の基準を明示する仮設物である。

〔No. 4〕 木造2階建て住宅における基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 基礎断熱とするに当たり、基礎と土台の間には、気密パッキン材を使用した。
2. べた基礎の根入れ深さは250 mm、かつ、建設地域の凍結深度より深いことを確認した。
3. 基礎の天端ならしには、セルフレベルング材を使用した。
4. 普通ポルトランドセメントを用いたコンクリートの打込み後、最低気温が15℃を下回らなかったため、型枠の存置期間を2日とした。
5. コンクリートは、特記がなかったため、スランプ18 cm、呼び強度24 N/mm²のものを使用した。

〔No. 5〕 図のような丸太材(針葉樹)の木取り位置A～Eにおける木材の乾燥収縮に伴う変形(網かけ部分)として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



丸太材の断面図

〔No. 6〕 木造住宅における木材の一般的な使い方として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 土台は、腹を上にして使用する。
2. 継手の相互の材については、送り継ぎ(元口と末口)又は行き合い継ぎ(末口と末口)とする。
3. 無節の材について、木裏にかんな削りをする場合は、元口から末口へと削る。
4. 浴室等の水回り部分には、白太材を使用する。
5. 柱は、末口を上にして使用する。

〔No. 7〕 桝組壁工法による平家建て住宅の建方順序として、最も適当なものは、次のうちどれか。

1. 土台 → 壁桝組 → 頭つなぎ → 床桝組 → 小屋組
2. 土台 → 床桝組 → 壁桝組 → 頭つなぎ → 小屋組
3. 土台 → 壁桝組 → 床桝組 → 小屋組 → 頭つなぎ
4. 土台 → 床桝組 → 壁桝組 → 小屋組 → 頭つなぎ
5. 土台 → 壁桝組 → 床桝組 → 頭つなぎ → 小屋組

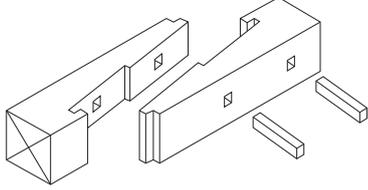
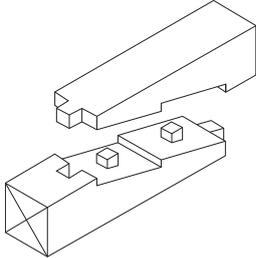
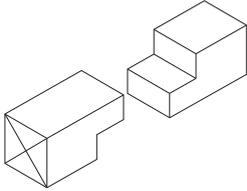
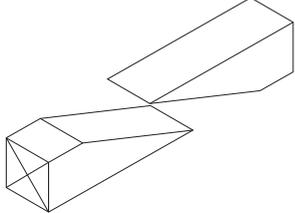
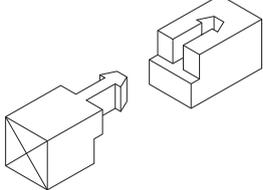
〔No. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 胴差 ————— ヒノキ
2. 柱 ————— ツガ
3. 小屋梁 ————— サワラ
4. 大引 ————— ヒバ
5. 段板 ————— ナラ

〔No. 9〕 木造2階建て住宅における合板等の施工・材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床勝ちとなる大壁造の面材耐力壁において、壁の下部に受け材を設けた。
2. 常時湿潤状態となる場所に使用する合板は、JASによる特類のものとした。
3. 大壁造の面材耐力壁において、厚さ7.5 mm以上の構造用合板を使用した。
4. 大壁造の面材耐力壁において、せっこうボード張り用の壁胴縁の間隔を455 mmとした。
5. 真壁造の面材耐力壁において、厚さ9 mmの構造用合板を用いたので、壁倍率3.3に適合させるために、CN50の釘を外周部の受け材に75 mm間隔、かつ、その他の部分に150 mm間隔で打ち留めた。

[No. 10] 木造軸組工法における継手の図とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

図	名 称
<p>1.</p> 	<p>金輪継ぎ</p>
<p>2.</p> 	<p>台持ち継ぎ</p>
<p>3.</p> 	<p>相欠き継ぎ</p>
<p>4.</p> 	<p>そぎ継ぎ</p>
<p>5.</p> 	<p>腰掛け鎌継ぎ</p>

(注) No. 10については、著作権法上の関係から、その出所等を明示しています。
 図の出典：2023年版フラット35対応 木造住宅工事仕様書(住宅金融支援機構)

〔N o. 11〕 木造軸組工法における仕口の名称とその使用箇所との組合せとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. かたぎ大入れ ————— 火打土台の仕口
2. 扇ほぞ差し ————— 土台同士の隅仕口
3. 大入れ蟻掛け ————— 土台と大引の仕口
4. 地ごくほぞ差し ————— 小屋梁と小屋束の仕口
5. しゃくしほぞ ————— 母^も屋^やと破風板の仕口

〔N o. 12〕 木造軸組工法において用いる金物(表示記号)とその使用箇所との組合せとして、最も不適當なものは、次のうちどれか。

1. 羽子板ボルト(SB・F2) ————— 軒桁と柱
2. 短ざく金物(S・S) ————— 1階の管柱と2階の管柱
3. 柱脚金物(PB-33) ————— 玄関ポーチの独立柱と土間コンクリート
4. ひねり金物(ST-15) ————— 垂木と軒桁
5. かど金物(CP・T) ————— 胴差と胴差

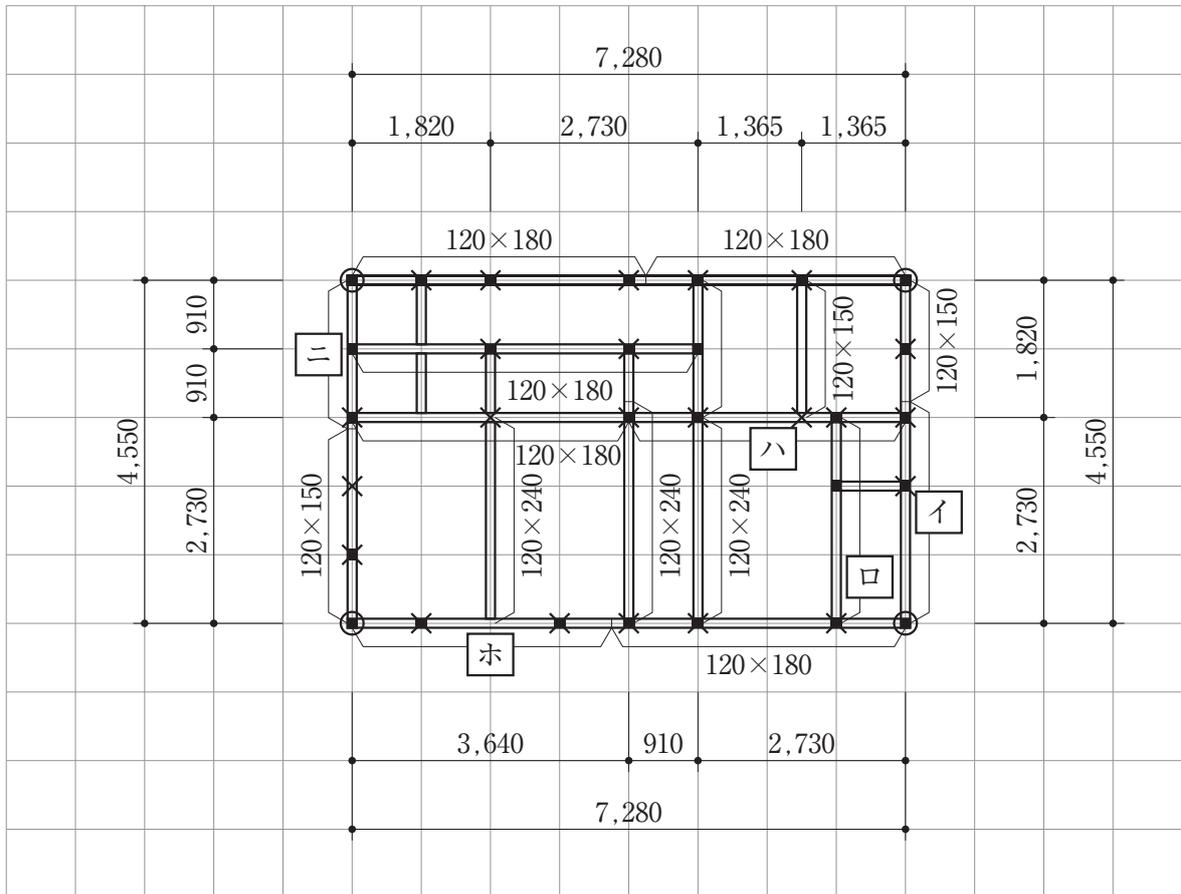
[No. 13] 規矩術きくにおける勾配に関する次の組合せのうち、最も不適當なものはどれか。

1. 半勾配 ————— 隅木の落掛かり勾配
2. 短玄の勾配 ————— 四方転びの上端胴付墨
3. 平勾配 ————— 垂木の流れ勾配
4. 倍勾配 ————— 45度の勾配
5. 隅中勾の勾配 ————— 隅木の山勾配

[No. 14] 規矩術きくの「さしがね使い」における表目と裏目との関係として、「裏目の10」と等しくなるものは、次のうちどれか。

1. 「表目の10」× $\frac{1}{\sqrt{3}}$
2. 「表目の10」× 円周率
3. 「表目の10」× $\sqrt{2}$
4. 「表目の10」× $\frac{1}{\sqrt{2}}$
5. 「表目の10」× $\sqrt{3}$

[No. 15] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材イ～ホとその断面寸法(幅mm×せいmm)の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、添え梁(枕梁)等はないものとする。

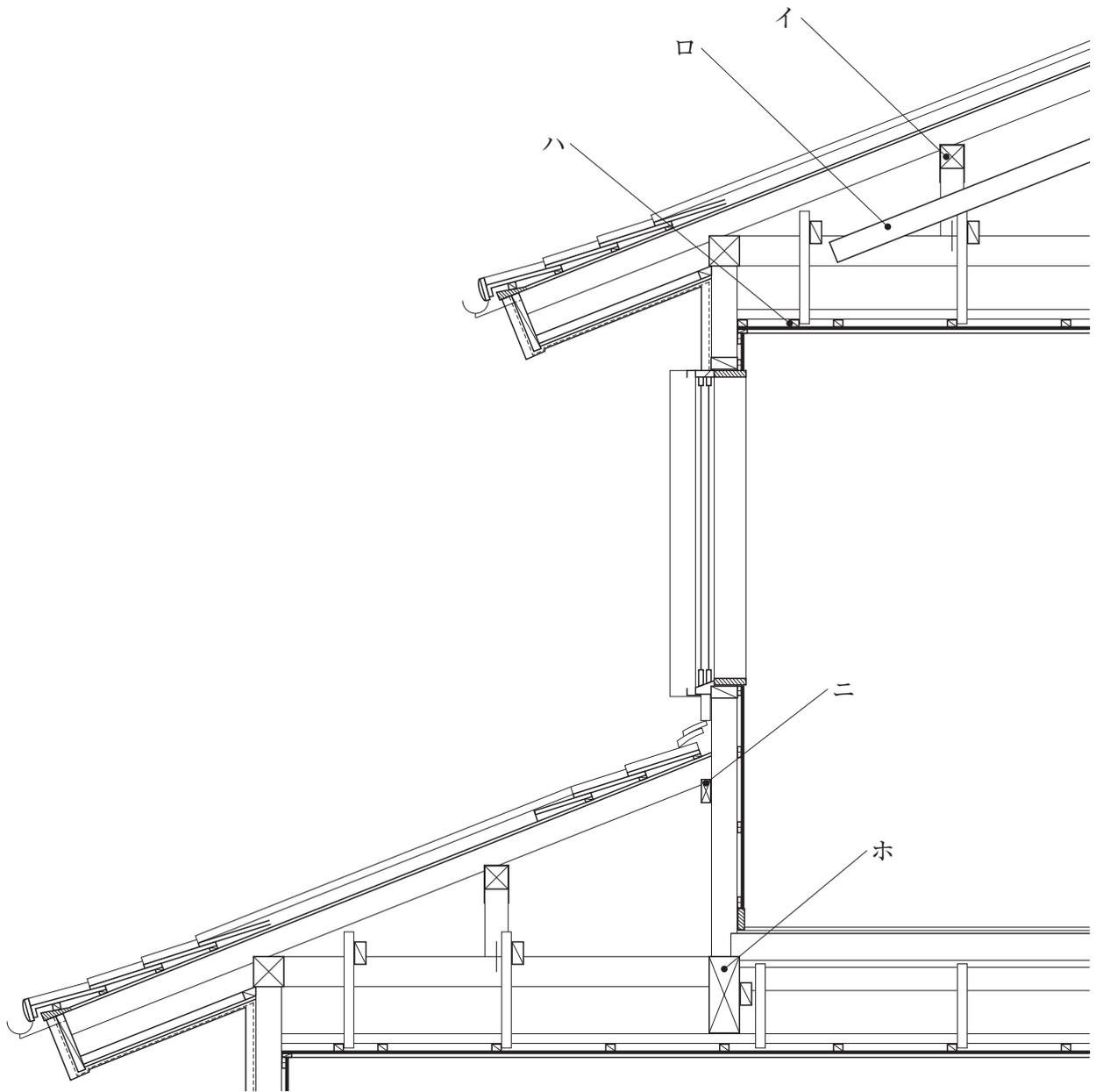


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		●	×	■	⊗	—	—

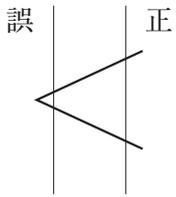
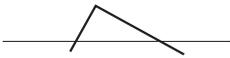
1. イ ————— 120 × 150
2. ロ ————— 120 × 270
3. ハ ————— 120 × 180
4. ニ ————— 120 × 210
5. ホ ————— 120 × 180

[No. 16] 図のような木造2階建て住宅の断面詳細図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— 母屋
- 2. ロ ————— 小屋筋かい
- 3. ハ ————— 野縁
- 4. ニ ————— 垂木掛
- 5. ホ ————— 軒桁

[No. 17] 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		間柱心印
2.		心印
3.		切り墨印
4.		にじり印
5.		峠印

〔N o. 18〕 木造住宅における防水工事及び屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 引掛け棧瓦は、全ての瓦を釘により留め付けた。
2. 金属板たてどいの受け金物は、取付け間隔を 1,200 mmとした。
3. 庇^{ひさし}の下葺に用いるアスファルトルーフィングは、壁面との取合い部において、その壁面に沿って 200 mm、かつ、雨押え上端より 50 mm以上立ち上げた。
4. 金属板一文字葺の隣り合った葺板相互の接合は、一重はぜ継手とし、千鳥に配置した。
5. バルコニーに設けたオーバーフロー管は、最も低い防水層立上り上端より低い位置に設けた。

〔N o. 19〕 木造住宅における左官工事及びタイル工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 壁の改良積上げ張りにおいて、二丁掛けタイルの1日の張付け高さを、1.2 m程度とした。
2. 壁タイルの接着剤張りの目地直しは、張り付けたタイルの接着剤が硬化した後に行った。
3. ラスボード下地へのせっこうプラスター塗りにおいて、上塗りは、中塗りが半乾燥の状態です塗り付けた。
4. 床コンクリート面へのセメントモルタル塗りは、コンクリート硬化後、なるべく早い時期に行った。
5. 壁のセメントモルタル塗りにおいて、ラスこすりの塗付け後の放置期間は、2 週間以上とした。

〔N o. 20〕 塗装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 吹付け塗装において、スプレーガンの運行速度は 1 秒間に 90 cm程度とした。
2. クリヤラッカーは、吹付け塗りとした。
3. コンクリート外壁面は、マスチック塗材塗りとした。
4. コンクリート壁面には、合成樹脂エマルジョンペイントを 2 回塗りとした。
5. 合成樹脂エマルジョンシーラーの希釈には、水道水を用いた。

〔N o. 21〕 木造軸組工法における断熱工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. ボード状断熱材は、反りぐせがつかないように、平坦な床の上に積み重ねた。
2. 外壁に用いる繊維系断熱材を充填する工法(はめ込み工法)において、防湿フィルム端部は、間柱の横に留め付けた。
3. 床下を床断熱としたとき、床下の冷気が壁内に入り込むことを防ぐために、間仕切壁と床との取合い部に気流止めを設けた。
4. 屋根の垂木間に断熱材をはめ込むに当たって、断熱材の屋外側に通気層を設けた。
5. 繊維系断熱材を充填する工法(はめ込み工法)において、外壁と天井との取合い部は、断熱層を連続させるために、天井の野縁を組む前に外壁の断熱材を施工した。

〔N o. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 管径 75 mm の屋内の排水横管の勾配を、 $\frac{1}{100}$ とした。
2. 住宅用防災警報器は、壁から 600 mm 以上離れた天井の屋内の部分、かつ、換気口等の空気吹出し口から 1,500 mm 以上離れた位置に設けた。
3. 屋外の雨水排水管は、埋戻し箇所の残材、廃物、木くず等を撤去し、十分に締め固めながら埋め戻した。
4. 給水管と排水管を平行に地中に埋設するに当たり、排水管が給水管の上方となるようにした。
5. 伸頂通気管の管径は、排水立て管の管径と同径以上とした。

〔N o. 23〕 木工事に関する用語とその説明との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 木殺し^{きころ} —— 木材の繊維を破壊しない程度にたたいてつぶし、部材同士を接合しやすくすること
2. ひかる —— 部材の取合い部において、一方の形状を他方へ写し取ること
3. 実矧^{さねはぎ} —— 一方の板に凸形の突起をつくり、他方の板に凹形の溝を彫って継ぎ合わせる接合方法のこと
4. 斫り^{はつ} —— 材の表面を少しずつ削り取ること
5. 逃げ墨 —— 基準墨に直角の墨のこと

〔No. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 所要数量とは、設計図書に基づいた施工計画により求めた数量をいい、仮設、土工等の数量が該当する。
2. 材料としての木材の所要数量を求める場合、木材の断面寸法は挽立^{ひき}て寸法とする。
3. 木材による開口部の枠、額縁などの所要材料は、内法寸法による長さ^{ひき}に、10%を加えた長さとする。
4. 足場などの仮設工事に係る労務費は、直接工事費に該当する。
5. 工事費における共通費とは、共通仮設費、現場管理費及び一般管理費等を合わせたものである。

〔No. 25〕 建築工事の工事請負契約書において、建設業法上、記載を要しない事項は、次のうちどれか。

1. 天災その他不可抗力による損害の負担に関する定め
2. 工事完成後における請負代金の支払いの時期
3. 注文者が工事の完成を確認するための検査の時期
4. 契約に関する紛争の解決方法
5. 建築確認の確認済証の交付された年月日

